第２２回綾瀬市
社会を明るくする運動作文コンテスト

入 賞 作 品 集

令和５年度

綾瀬市社会を明るくする運動実施委員会

目　次

綾瀬市長賞

・小学校の部
『三つの「あい」を大切に』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・西山　修矢　綾西小学校六年　1

・中学校の部
「笑顔の扉」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大光寺　莉結　春日台中学校三年　2

綾瀬市社会を明るくする運動実施委員会委員長賞

・小学校の部
「姉の反抗期」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・井上　雄貴　寺尾小学校五年　4

・中学校の部
「笑顔の力」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・築井　果愛　春日台中学校三年　5

大和・綾瀬保護司会綾瀬地区会会長賞

・小学校の部
「許されざるポイ捨て」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・金子　美心　北の台小学校六年　6

・中学校の部
『「身近な知らない人」』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北田　紬　春日台中学校三年　7

綾瀬市更生保護女性会会長賞

・小学校の部
「家族との時間」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・亀岡　莉紗　早園小学校五年　9

・中学校の部
「もう一度つながる社会のために」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・浜野　真衣　春日台中学校三年　10

綾瀬市長賞

小学校の部

三つの「あい」を大切に

綾西小学校　六年　西山　修矢

ぼくは、まわりの友達や大人の人のおかげで、学校や習い事で明るくすごす事ができています。だから、そんな人たちの中から、明るい社会について、考えたいと思いました。

まず、ぼくは、犯ざいが、どうやったらおきないか、考えました。それには、三つの場面があると思いました。それは、わるい気持ちが出ないようにすること、わるい気持ちが出てしまったときのこと、わるいことをしてしまったときのことです。この三つの時に大切な「三つのあい」について、ぼくは考えることにしました。

一つ目は、わるい気持ちが出ないようにするためのことです。そのために、大切なあいは、「あいさつ」です。ぼくが、毎日、綾西小学校に行く時、いつもみまもり隊の人たちが、あいさつをしてくれます。ぼくが、みまもり隊の人にあいさつをすると、いつもえがおで反応してくれます。その時、ぼくは心が落ち着き、仲よくなれた気分になります。

あと、校長先生に、おはようございますと言った時に、「いいあいさつだね。」と、ほめてくれました。その時から、もっと自信をもってあいさつができるようになりました。あと、あいさつをすることが楽しく感じられるようになりました。あいさつをすると、心があたたかくなります。ぼくは、これからも、いやなことをふっ飛ばすくらいのあいさつをしていきたいです。

二つ目は、わるい気持ちが出てきてしまった時のことです。そのために、大切なあいは「助けあい」です。ぼくが、学校で、どうやって書けばいいかなやんでいる時、すこしモヤモヤしていました。その時、クラスの友達が、

「これ、教えようか。」

と助けてくれました。その時、ぼくは自然と自分のことを気にかけてくれたことが、とてもうれしかったです。

もう一つは、自分が助けたことです。クラスの友達が、休み時間の時、変なあだ名をつけられて困っていました。その時、近くに行って、

「ちょっと一回はなれよう。」

と言って、二人をはなしました。そしたら、その子から、ありがとうと言われました。ぼくは、その時、勇気をもって助けてよかったなと思いました。これからも、困っている人に対して、積極的に助けて、いやな思いやモヤモヤした思いを、なくしていくことが大切だと思いました。

三つ目は、わるいことをしてしまった時のことです。そのために、大切なあいは、「認めあい」です。ぼくは、三年生か

ら、北の台早園サッカークラブに入っています。そこにいる、〇〇コーチが、キャプテンに指名してくれたり、大事なポジションで使ってくれたりしました。自分のことを認めてくれると、ぼくは、チームや仲間のために、もっとがんばろうという気持ちになりました。

もう一つは、担任の〇〇先生のことです。〇〇先生は、グループやクラスで話し合う時に、ぼくが意見を出すと、たくさん認めてくれます。先生が認めてくれると、うれしい気持ちや、他の事もがんばってみようかなと思うようになりました。そのおかげで、６年生のクラスは、いい友達もできて、色々な人といい関係になれるクラスになりました。これからも、認め合えるいいクラスをつづけていきたいです。

ぼくは、この「三つのあい」を大切にして、明るい社会をつくっていきたいです。

綾瀬市長賞

中学校の部

笑顔の扉

春日台中学校　三年　大光寺　莉結

満開に咲いている桜の時期に父は突然、倒れて亡くなった。二〇一七年四月、父は当時小学校三年生だった私と母を置いて一人で逝ってしまった。あの日から私と母の二人での生活が始まった。今でもよく覚えている。父が亡くなる数日前、母が私に言った。

「どんなに辛くて悔しい事や悲しい事がこの先あっても過去を変える事はできない。とにかく広い空や上を見上げて笑っていれば必ず良い事がある。」

母は父がもうすぐこの世を去る事をわかっていたのかもしれない。今思えば、母が私に言った事は母自身が自分に言い聞かせている事だったかもしれない。母は私より父と過ごした時間は長いのに、父が亡くなってから今まで私は母の涙や弱くなる姿を見た事がない。とにかく毎日、私の前で顔をくしゃくしゃにして笑っている。父が亡くなって母と二人きりで過ごす時間が始まり七年目になった。

小学生だった私は当たり前のようにこれまで家に居た父が

もう居ない。悲しさと辛さで何度も心が押し潰されそうになった。一番辛かったのは小学校の頃の運動会。一、二年生の頃は運動会のお弁当の時間に父と母、三人で食べていたけれど、父が居なくなってからは母と二人で食べる事になる。雨が降って順延になりお弁当ではなく給食が良いなと思う時もあった。運動会が平日開催ならお弁当ではなく教室に戻って給食を食べるからだ。でも、幼稚園の頃から家族ぐるみで仲良くしている友人と一緒に食べる事ができた。友人のお母さんが私の母に、

「これからも一緒に食べようね。」

と誘ってくれたのだ。私も母も寂しくなかった。寄り添ってくれる友人達の存在が日々、私を強くさせてくれた。

中には悪気なく、

「お父さん、なんで死んじゃったの？」

「お父さん、事故？病気？」

など聞いてくる友人もいた。その度に、

「病気だよ。」

と真面目に答えていた。聞かれるのが嫌ではなく、その度に父と過ごした時間を思い出すのが辛かったからだ。その気持ちを母に話すと、母は、

「お友達に聞かれる度にパパを思い出す事ができるって、パパ大喜びしてるよ。でも悲しい気持ちではなく、パパと過ごした時間が本当に幸せだったな、と思えたらもっとパパは喜ぶよ。」

と言った。その時の私は違う言葉を求めていたから、更に寂しくなった。でも、今なら分かる。この六年、一番近くで母を見てきて、母は父との楽しかった時間があるから今も父が居た頃と何も変わらない明るい母なのだと。

父を亡くしてから周りの人は私と母の姿を見て心の中では「可哀想」と思っていたかもしれない。でも、私は友人に支えてもらい、今日まで笑顔を絶やさず過ごす事ができている。失ったものはとても大きかったけれど、それ以上に得たものが沢山ある。何度も友人の笑顔に救われた。何度も友人の言葉や姿にお腹がよじれるくらい大笑いした。私が私で居られる場所をみんなが作ってくれた。母が言っていた、

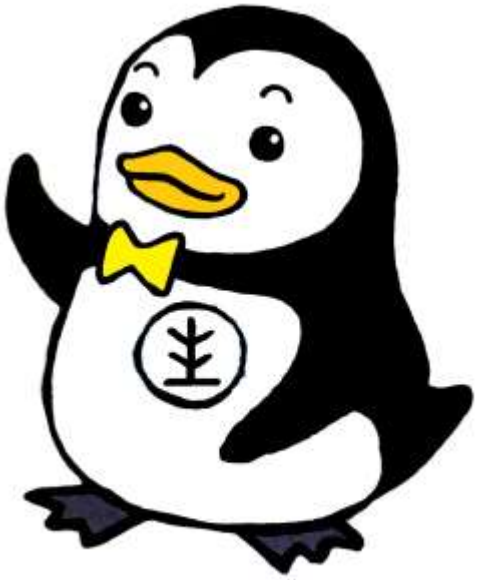
「笑っていれば必ず良い事がある。」

本当にそうだと思った。自分が悲しい顔や寂しい顔をしていたら相手も困る。私が笑っていれば相手はそれ以上に笑ってくれる。その友人の笑顔が何よりも私にとって生きていく意味を教えてくれた。

時に何気なく言った一言で人を傷つけてしまう事もある。相手がどんな気持ちになるか考えて行動する事は難しい事かもしれない。その一言で相手の自由に生きていく権利を奪ってしまうかもしれない。いかに言葉が重要であるか私自身、十分に気をつけて意識を持って過ごしていきたい。

これから長い人生の中で私と同じ境遇の人に出会うかもしれない。その時は言葉はなくても優しく寄り添い、相手の悲しみやいたみを少しでも拭い取ってあげたい。そして、笑い

ジワが増えた私の母のように、私も笑って歳を重ねていきたい。



綾瀬市社会を明るくする運動実施委員会委員長賞

小学校の部

姉の反抗期

寺尾小学校　五年　井上　雄貴

僕には6才離れているお姉ちゃんがいます。今〇〇高校の二年生です。頭はいいのに家ではよくお母さんとけんかしています。お母さんは「今反抗期だからしょうがないの。いい子に育つことがいい事ばかりじゃないから成長しているしるしよ。」とよく言っています。でも、時にお母さんも火がついたかのように、お姉ちゃんと争うのです。近所に、はずかしいから僕が間に入って止めたりします。

お母さんのイライラは、近所におばあちゃんとおじいちゃんがいるので、いつもおばあちゃんに文句を言ったりして、スッキリして帰ってくるのです。おばあちゃんは僕に昔はすぐ親が約束を守らなかったり、いけないことをしたらおしりをたたいたり、玄関に立たせたりして、近所の人にもおこられたりしたそうです。今はたたいたりしたら問題になるし、教育の仕方がちがうから子供の叱り方も昔とすごくかわったそうです。お母さんは近くにおばあちゃんがいるから文句を言えるからいいけど、周りに相談できる人がいないとあんな

反抗期にたえられないと思います。
僕は、お姉ちゃんをみているからお母さんを困らせるような事はしないようにするけど、昔のように近所の人が話しかけてくれるよう僕はあいさつをするようにしようと思いました。６才離れているお姉ちゃんがいて、反抗しているときはきらいだけど、普段はやさしくおもしろいので、やっぱりお姉ちゃんがいて良かったし、家族が僕は大好きです。
６才はなれている分、いろいろ学んで僕はかしこく、頭は悪いけど思いやりのある人間になりたいです。愛情があれば、いやなことがあっても、いけないことはしないと思います。愛情が一番だと思いました。

綾瀬市社会を明るくする運動実施委員会委員長賞

中学校の部

笑顔の力

春日台中学校　三年　築井　果愛

誰もができる、声にしなくても人を元気づけられる強力な道具は何でしょうか。それは笑顔です。私は、笑顔が社会を変化させると思います。
笑顔は人間関係を円滑にします。笑顔が多い人といつも無表情な人、人はどちらに惹き付けられるでしょうか。多くの人は笑顔の人と答えるでしょう。笑顔は人をポジティブな思考に導き、リラックスさせる効果があると多くの研究で分かっています。また、笑顔は周りに伝染するとも言われています。スマイルサイエンス学会代表理事の菅原徹さんによると、「笑顔の人につられて笑顔になると表情筋が刺激されます。すると、ドーパミンやエンドルフィン、セロトニンといった快に関する神経伝達物質が分泌され、気分が良くなるのです。すると、相手もまた笑顔につられて笑顔になるので、お互いに良い気分が伝染するのです。」と述べておられます。笑顔が多い人に人間が惹き付けられるのは、「あの子の笑顔を見ると私も笑顔になれて楽しい気分になるから。」という理由からで

す。笑顔は人々に良い影響を与え、循環していくのです。私の身近にも、いつも笑顔で私を励ましてくれる人がたくさんいます。その中の一人に私の弟がいます。イライラしたり悲しい気持ちになっていても、彼のニコッとした笑顔を見ると私の負の感情も溶けて私も顔がほころんでいきます。私も彼のように、笑顔で人を元気にさせるような素敵な人になりたいです。

心からのほほ笑みは、心の内にある楽しさや、幸福感、喜びなどといったポジティブな感情から生まれます。ですが、背景や環境ゆえに心からほほ笑むことのできない人達はどうするのだろう、と思いました。そこで私は、海外の人達が見知らぬ人々にもよくほほ笑みかけているのを思い出しました。日本人の私からすると、赤の他人にほほ笑むなんて変じゃないかと思えました。ですがそうされるととても幸せな気持ちになるのです。ですから私も、知らない人にもポジティブな感情を共有したいと思い、笑いかけてみることにしました。すると、大体の人は笑顔を返してくれたのです。笑顔の循環を身を持って体感できました。

私はこのようにして、笑顔によって社会を変えたいです。誰かのほほ笑みによって、一日の中での小さな喜びを見い出し、希望を抱いてほしいです。

大和・綾瀬保護司会綾瀬地区会会長賞

小学校の部

許されざるポイ捨て

北の台小学校　六年　金子　美心

私は、この前、外で遊んでいると、私の足に何かがあたりました。下を見てみると飲み物のアキ缶でした。「痛った！あぶないな、なぜすぐにごみ箱に捨てないのだろう」と思いました。私は辺りを見回しました。よく見てみると他にもごみが落ちていました。

捨てた人は「きっと回りにごみがたくさん落ちているから自分も捨ててもいいや」って思ってしまったのかなと思うと悲しくなりました。

私は、遊んだ後、少しモヤモヤしながら帰りました。「ごみ箱をもっとたくさん置けばいいのにな」と思います。でも、ごみ箱を置くと回収するのに、お金がかかるって先生が言っていたのを思い出しました。家で調べてみることにしました。

「日本は、年間に排するゴミの量は一人あたり三百二十キロです。そして、ポイ捨ては世界８位です。」ここから読み取れることは、日本は、本来きれい好きだということが読み取れます。ちなみに、ポイ捨てが一番少ない国はシンガポールだ

そうです。くわしく調べると、シンガポールでは、ポイ捨てをするとたくさんの罰金が取られます。私はそれを知った瞬間「これだ！」と思いました。この罰金でリサイクルボックスをもっと設置すれば、町がもっときれいになれば良いと思います。

そして私は、あることに気づきました。

それは、ポイ捨てした人は、本当は、きれい好きな人だけど回りにたくさんごみが落ちていたので、「自分が捨てても、分からないや」と思ってしまったのかなと思いました。

テレビで見たニュースの特集の学校のいじめ問題も似ているなと思って私は、さらに悲しい気持ちになりました。

周りの人が間違ったことをしている時、自分は、できる気がしないけどがんばって、注意したいと思いました。

よく考えると、なんでもかんでも、罰金でしばられるのも良くないと思いました。が、悪いいじめをしている子からは、たくさん罰金取っても良いと思います。「許すまじ…。」そして、社会はより明るくなると思います。

大和・綾瀬保護司会綾瀬地区会会長賞

中学校の部

「身近な知らない人」

春日台中学校　三年　北田　紬

私には、知らない「知っている人」がたくさんいます。私だけではなく私の家族も、同じように知らない「知っている人」がいます。

そんな人たちと出会いは、私が生まれた時から始まり、毎年のように一人、二人と増えていっているように思います。

私たち家族は、私が生まれた年に今の地域に引越してきました。ここは、地域を取り巻く様々な活動が活発のようで、イベントも盛んに行われていて、新たに加わった私たち家族も少しずつ参加していく中で、自然と地域の人達との関わりも増えていったそうです。

ここでの暮らしに慣れてきた頃、知らない「知っている人」に最初に会ったのは父のようです。帰宅した父が母に問いたそうです。『「おかえりなさい」って言われたんだけど。この場合は何て返事をするのが正解？』と。誰かは知らない。けれど、同じ地域の方に言われた。もう数回目になると。同じ家に住んでいなくても「ただいま」と答えることが合ってい

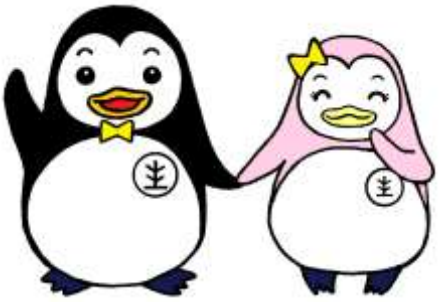
るのか。父は考えてしまったそうです。それでも、そんな質問をする父の顔は、戸惑いとは違い、笑いながら少し嬉しそうだったと母は話してくれました。

その次は、幼い頃の私を連れていた母です。急に一人の散歩中の方に話し掛けられたそうです。「奥さんごめんなさいね。私、ずっと、男の子だと思っていたわ」と。その日私はピンクのスカートをはいていたそうです。母にとっては「時々見かける、華やかなお洋服を着ている人」という認識だったそうですが、わざわざ間違えていたことを口にするなんて、正直な方なんだなぁと思い、心がほっこりしたと言っていました。

小学校へ入学した兄が、両親のいないところでもすすんでご近所の方に挨拶をしているということを教え、褒めてくれたのも知らない「知っている人」でした。両親は兄の成長した姿を知ることができ、嬉しく誇らしい気持ちになったそうです。そして、自分達の子育てにほんの少しの「いいね」をもらえたようでもあったと言っていました。

０才だった私は今年十五才に。小学校入学前だった兄は去年成人式を迎えました。祖父母や親戚が遠く離れた所にいる私たち家族にとって、この地域に住む声を掛け合い、成長を見守ってくれた人はとても大切な人たちでした。知らない「知っている人」から、名前で呼ぶようになった人。今も変わらず私達兄妹に声を掛けてくれた人。インターホン越しに「雨が降ってきましたよ」と洗濯物を気にして教えてくれる犬の散歩中の人。時々面倒だなとか、話し掛けられることを恥ずかしいと感じることがなかった訳ではないけれど、家族以外の誰かに掛けてもらえているという、何とも説明しづらいふんわりとした安心感のようなものが、ずっと消えずに私達家族の側にあるように思います。

地域社会というのは、家族という言葉ほど温かみはないかもしれないけれど、そこにはたくさんの人達「みんな」がいます。この場所があるということ。それは大事なことです。とても価値のあることです。私はその価値の中で暮らしています。私も誰かの知っている「知らない人」としてみんなのふんわりとした安心感のような物になっていたらいいなと思います。



綾瀬市更生保護女性会会長賞

小学校の部

家族との時間

早園小学校　五年　亀岡　莉紗

私の親は、共働きです。お父さんは朝早くから仕事に行って、お母さんは私が学校に行くまで家にいてくれます。

私が家を出て、数十分後にはお母さんも仕事に行きます。学校から帰ってくるころにはお母さんが仕事から帰ってきていることが多いです。お父さんは、私がねるころに帰ってくることが多く、日によっては一度も会えない日もあります。でも、仕事が休みの日にはお父さんが家族をつれてドライブに行ってくれます。平日に、仕事にたくさん行ってつかれているだろうけど、ドライブに行くとみんな楽しそうで息ぬきになっているのかな、と思いました。お父さんとお母さんは、どんなに働くことが大変でも家族といっしょにいる時間を少しでも多くとろうとしてくれました。働いて、もらったお金はドライブなどにかかるお金や、生活費、私がほしい物などに使ってくれました。

お母さんとお父さんはいつも自分じゃなく私を優先してくれます。私的には、もっと自分を優先してもらってもいいんだけど、お父さんとお母さんが家族のことを考えて、がんばって働いて、いっしょにいる時間を増やしてくれていることがわかったので、私もお父さんとお母さんを少しでも休む時間を作ったりして、たくさん思い出を作っていきたいなと、思いました。

綾瀬市更生保護女性会会長賞

中学校の部

もう一度つながる社会のために

春日台中学校　三年　浜野　真衣

みなさんは自分の家の近所の人のことをどれくらい知っていますか？名前、家族構成、だいたいの年齢など本当に簡単なことを知っていますか？

「肉じゃがを作りすぎちゃったからおすそ分けです。」

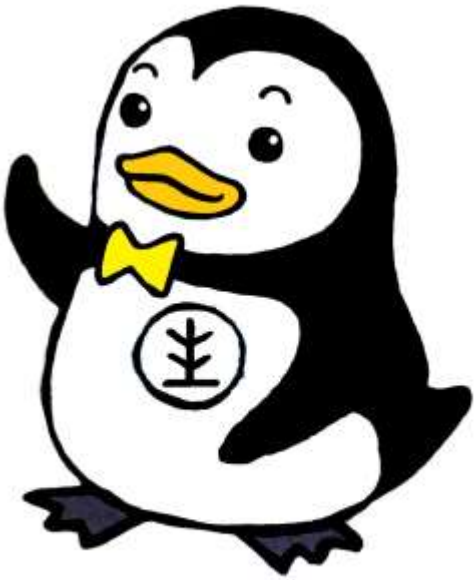
「しょうゆを切らせていて、貸してもらえませんか？」

このような昔は日常的にあったであろう光景を最近は見なくなりました。見るとしても、おじいちゃんやおばあちゃんなどの高齢の方ではないでしょうか。実際に、私の家では特にそのようなことはしないけれど、近くに住んでいるおばあちゃんはよく近所の人に料理をあげたりマンションの管理人さんに飲み物を渡したりしています。

現代は、技術の進歩によってそのように近所で協力する必要がなくなったのだと思います。欲しいものはネットで買えるし、外食もできるし、すぐに必要な物があってもコンビニに行けば良いからです。だから別に、近所の人のことを知らなくても自分一人で暮らせるようになりました。

また、私が小学校低学年の時には毎日の通学路にパトロールのおじいちゃんやおばあちゃんが何人も立ってくれていて「おはよう！行ってらっしゃい」「おかえり」と声をかけてくれていました。でも高学年くらいになったときには少し人が減っていて、中学三年生となった今では見かける日もあれば見かけない日もある、そんな状態です。そんな日を経験して初めて私はいつものパトロールの方がいることへの安心感を得られました。私はこのような地域への安心感がもっと必要だと思います。

近所との関わりの少ない今の環境を便利と思う人もいるかもしれませんが、昔から関係を大切にしていた高齢の方や子供にとっては不安とも思います。実際、子供が犯罪に巻き込まれやすい。それは地域の防犯能力が下がっているということです。それを防いでいくには人と人がもっと関わり合って小さなコミュニケーションを積み重ねていくのが大切だと思います。

かといって急に昔みたいに料理を渡したり近所の人について知るということではなくて、まずは「挨拶」です。近所の人とすれ違ったときに「こんにちは。」、パトロールの人を見かけたら「ありがとうございます。」、学校で先生や友達に「さようなら。」「また明日。」。日常生活の中で挨拶を探してみると思ったよりたくさんあることに気がつくはずです。でも、それを実際に言葉にするかどうかは自分自身で決めることです。ぜひ、自分から声を届けてみてください。

そうやって自分だけではなく地域の人たちと共に生きていく、そんな共生の社会をつくっていくことが社会を明るくするために大切なことだと思います。そこで私ができることは、いつも同じ挨拶をするのではなく、色々な挨拶を色々な人にすることです。また、人が自分にしてくれた挨拶をしっかり受け取れるような人になりたいです。